

「障害の多様化に対応した職業リハビリテーションツールの効果的な活用に関する研究」 におけるヒアリング調査結果について

○山科 正寿（障害者職業総合センター 主任研究員）

田村 みつよ・武澤 友広・村久木 洋一・渋谷 友紀・國東 菜美野・知名 青子・小池 磨美・
井口 修一・田中 歩（障害者職業総合センター）

1 はじめに

障害者職業総合センター障害者支援部門では、平成11年度から「職場適応促進のためのトータルパッケージ」（以下「トータルパッケージ」という。）の開発を進め、現在までの間、支援現場におけるトータルパッケージの汎用性を高めるための研究を行っている。トータルパッケージを介した職業リハビリテーションの支援技法の伝達は、対象者の就職や復職に向けて一定の効果があることが示されているが¹⁾、一方で普及における課題として、人材の育成や研修の必要性が繰り返し指摘されてきた²⁾。

「障害の多様化に対応した職業リハビリテーションツールの効果的な活用に関する研究」（以下「本研究」という。）では、普及における課題解決を目指し、効果的な活用を行うための人材育成や伝達方法（以下「伝達試案」という。）を検討するために、各機関の支援者に対してヒアリング調査を行った。今回、その概要を報告する。

2 ヒアリング調査の概要

(1) ヒアリング調査の目的

トータルパッケージの支援理論については、関係機関間の連携を強化し、支援者のスキル向上に役立つものとしても報告されているが³⁾、現在の支援機関で発生している課題や要望等を把握することにより、問題点や課題の詳細な抽出と、伝達方法を検討する際の参考となるべき事象を具体的に把握することを目的として実施したものである。

(2) 対象の選定とデータの収集方法

伝達試案作成にあたり、既存のトータルパッケージの支援理論を理解したうえで、先進的な職業リハビリテーションサービスを展開している支援者を選定してヒアリングを行った。なお、ヒアリング対象者を選定するにあたり、全国の地域障害者職業センター及び全国の就労支援機関が参画する団体の理事からの推薦を経た。なお、対象者の自由かつ率直な意見を担保するために、個人名及び所属機関を公開しない前提でヒアリングを行った。対象者の内訳は以下のとおり。

○高次脳機能障害のリハビリに知見を持つ専門医	1名
○障害学生のキャリア教育に知見を持つ大学教員	3名
○全国就労支援団体理事	1名
○障害者就業・生活支援センター 支援者	6名
○就労移行支援事業所 支援者	5名

○医療リハビリテーション機関 支援者	2名
○企業における障害者雇用 担当者	1名
○ひきこもり・在宅就労支援 支援者	2名
計	21名

データ収集のためのヒアリング方法については、半構造化面接とし、対象者1名に対して、インタビュアー1名と筆記者1名の計2名でヒアリングを行った。質問項目は以下の3点とした。

- イ トータルパッケージを構成する各ツールや支援理論の活用・実施状況はどうか
- ロ トータルパッケージを構成する各ツールや支援理論の改修や改善の要望はあるか
- ハ トータルパッケージに関する情報提供に対するニーズは何か（希望する情報提供の形式・内容等）

(3) 収集したヒアリングデータの概要

ヒアリングの結果、「トータルパッケージの理論や枠組みは参考になる」といった支援理論の理解の広がりを示す発言があった一方で、「MWSの活用を職員全体で共有できる機会や分かりやすい媒体があると良い」という課題の提示や「障害周辺にいるボーダレスな人に対する支援方法を具体的に提示してほしい」、「支援場面でMWSを使って支援していると、意欲が持続しない利用者がいる」、「トータルパッケージの効果や意味を説明できるようなものや、意欲を保てるしくみが不可欠だと考える」といった、支援対象者像の多様化にともなう、具体的な支援方法の提示について、多くのニーズや意見を収集できた。

(4) ヒアリングデータの質的分析方法

本研究では、ヒアリングデータの分析を、ある特定の属性を客観的・体系的に同定して、推論を行える内容分析⁴⁾により行うこととし、以下の6段階の過程を経た。

第1段階	リサーチクエスションの決定
第2段階	質問への回答のデータ化：回答のなかから不要な部分を削除し、素データを作成する
第3段階	基礎分析：大量のデータを可能な限り単純化
第4段階	本分析：類似した意味内容の要素を探し、それを適確に表す表現へと置き換える（カテゴライズ化）
第5段階	カテゴライズ化したうえで、意味的類似性に基づきカテゴリーを統合し、研究班により解釈を行う。
第6段階	カテゴリーの信頼性の確認：形成されたカテゴリーの信頼性を確認する

なお、分析はトータルパッケージツールによる支援経験のある研究員3名と、MWS新規課題の開発に携わったツール及び支援理論に知見を有する研究員2名の計5名の研究担当者（以下「研究班」という。）で行った。

3 ヒアリングデータ分析結果

(1) 第1段階・第2段階

決定したリサーチクエスチョンに基づき設定した質問に対する回答内容を記録し、第2段階で回答データから不要な部分を取り除き、回答者の主旨が明確になるようデータの整理をした。

(2) 第3段階：基礎分析

整理したデータから、回答者が各質問で同様・同意の回答をしている内容を一つに統合した。

(3) 第4段階：本分析

各回答を文章ごとに区切りカード化した後に、研究班による協議で、カード毎に意味的類似性に基づいてカテゴリー化した（図1）。



図1 抽出カテゴリー

(4) 第5段階：

第4段階で生成したカテゴリーをさらに統合化し、伝達試案の検討に資する3つのカテゴリーに分類し（図2）、その3類について解釈を行った。

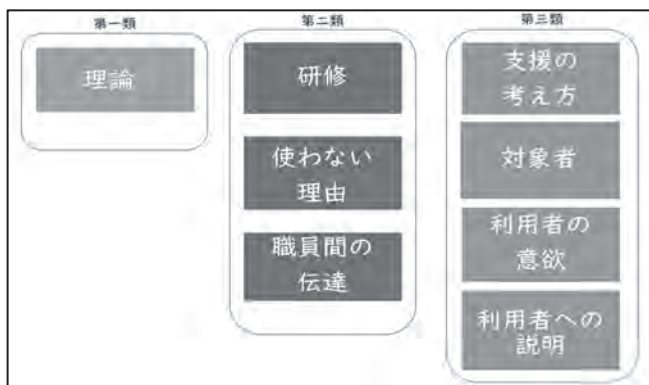


図2 統合したカテゴリー

(5) 第6段階：カテゴリーの信頼性の確認

解釈の結果（図3）、次に示す3点の示唆が得られた。
①開発時と比較し、職業リハビリテーション利用者の多様化にともない、利用者が意欲的にツールを活用できる支援

方法の重要性が増している。②トータルパッケージの支援理論と実践ノウハウを共有できる媒体（研修など）が必要になっている。③トータルパッケージの理論は妥当性が高いものであり、支援者の資質向上に寄与し、多くの支援機関で支援方法のベースとなっているものとして評価を受けている一方で、支援理論を導入する際において、既存のマニュアル等により支援理論を理解することの困難性が指摘されている。

本研究のヒアリング結果から示された、トータルパッケージ理論の妥当性と、支援機関の支援技術のスキル向上に関する有用性については、現在までの研究経過において同様の報告がなされており^{1) 2) 3)}、一方で、MWS等を購入した全支援機関及び全地域障害者職業センターを対象としたアンケート調査の自由記述の内容からも、伝達試案の検討に関する課題について同様の意見や要望が確認されていることから、分析結果は一定の信頼性があると考えられる。

理論	TPの理論は妥当性の高いものであり、支援者の資質向上に寄与するもの、支援のベースになるものとして評価を受けている。その一方で、理論を導入することの難しさも指摘されている。
研修	また、同じ施設に所属していてもMWSを活用する職員と全く使わない職員に二分され、ノウハウが共有されないまま、前者が離職した途端に施設での活用も途絶えるという課題も報告されている。以上のことから、TPの理論と実践に関するノウハウを共有することを可能にする媒体（研修など）が必要である。
対象者	TPが開発された当時と比べると、職業リハの利用者の幅は広がり（診断のない発達障害者など）、中心となる利用者も変わっている。利用者が意欲的にTPを活用できるような導入、説明の仕方、支援の考え方（できないことに焦点を当てるのではなく、できること、良い面に着目する）等を再考する必要がある。

図3 研究班による解釈図

4 考察（まとめ）

本研究のヒアリング調査結果から、利用者が意欲的にMWS等ツールを活用したサービスを利用できるよう、既存のトータルパッケージ支援理論を、対象者に分かりやすく伝えることのできる教材や研修プログラムを作成し、その効果が支援機関内で共有されるようなシステムの在り方を検討することが、本研究において重要であると考えられた。

【参考文献】

- 1) 障害者職業総合センター：「特別の配慮を必要とする障害者を対象とした、就労支援機関等から事業所への移行段階における就職・復職のための支援技法の開発に関する研究」〔調査研究報告書 No. 93-1. 2〕（2010）
- 2) 障害者職業総合センター：「障害の多様化に対応したワークサンプル幕張版（MWS）改訂に向けた基礎調査」〔資料シリーズ No. 72〕（2013）
- 3) 障害者職業総合センター：「ワークサンプル幕張版 MWS の活用のために」（2010）
- 4) 舟島なをみ：「質的研究への挑戦」医学書院（2007）

【連絡先】

障害者職業総合センター障害者支援部門（山科）
Tel：043-297-9082
e-mail：Yamashina.Masatoshi@jeed.or.jp